



## 九州工大の情報化推進体制への期待

熊丸 耕介<sup>1</sup>

情報科学センターでは、情報教育・研究を支援する共同利用施設として平成元年以来様々なキャンパスサポートメーション計画の立案と実施に充てられました。具体的には、事務処理(物品発注・会計処理)ネットワーク化や教務・学生システムの電子化、キャッシュレスシステムの運用、図書館における学内LANを通しての文献検索、等々です。今後とも、ネットワーク技術の発達・高度化に伴い、学内LANの管理運営やインターネットに代表される学外施設との相互利用へのネットワークサービスへ向けて、センターの果たす役割は益々大となることとされます。現在情報工学部には、この様な情報化推進のための委員会として情報化専門委員会が設置されています。この委員会は、各学科より専門的立場から選ばれた教官と情報科学センター及び学部事務から選ばれた関係者により委員が構成され、特に情報科学センターにとってはその下部WGという位置づけになっています。委員長や委員関係者に伺った所に依れば、情報化専門委員会では、本学部の各種委員会や事務部、図書館(分館)から出された電子化システム開発要求を集約検討し、同委員会に設けられた作業委員会において、その具体化のための企画・設計を行いコーディングテストと試用を通してシステムを構築し、その運用に当たっては利用者指導とシステム管理にも携わるとのことです。これまでに本学部において具体化された各種電子化システムとその運用に対して、この情報化専門委員会と委員各位の果たされた貢献に心より敬意を表したいと思います。

さてご承知の通り、今や図書館は資料や蔵書の集積・保管と利用の場という建物的存在から、あらゆる知的情報を収集・管理・発信する源としての機能的存在へと変貌しております。大学図書館をめぐるネットワークの伸展は驚くべきスピードで進行し、特に近年のキャンパスネットワークやインターネットの発展により、【電子図書館構想】は新たな段階に進むべき時に来ております。6月28日-29日に開催された国立大学図書館協議会総会においても、話題は専ら図書館の電子化に集中し、図書館情報システム特別委員会の報告と共にいくつかの大学図書館で進められている電子化への取り組みや電子図書館プロジェクトの紹介がありました。附属図書館長としてこれを聞いていて痛く私の心に残りましたことは、

全国に先駆けて設置された情報工学部を持ち、情報技術専門教官という知的人材と情報科学センターという立派な施設に恵まれた本学が、この様な協議会総会の場で、何故、電子図書館プロジェクト紹介の一つも出来ないのか。時代の趨勢に合った、まさに本学が最も得意とすべき分野の課題なのに...

という想いでした。本学附属図書館においては、小宮前館長の指揮の下で【図書館の現状と課題】と題する冊子がまとめられました(平成7年3月発行)。これによれば、本学ではいち早く図書館用電子計算機の

<sup>1</sup>附属図書館長、情報工学部 制御システム工学科 教授

導入を行ったものの(昭和52年3月)、現状では他大学に誇るべき目新しい電子化図書館システムを備えている訳ではなく、特に工学部図書館では早急に設備の充実と新たな電子化対策を講じる必要があると報告されています。これを受けて附属図書館では、[電子図書館構想]をこの夏休み中にまとめております。これは、図書館入退館管理システム、図書館情報サービスシステム、図書館情報処理システム、図書館OAシステム、図書館AVシステム、及び各システムの支援体制の6項目から成り、各項目毎に整備に必要な機器システムを挙げています。近い内にこの構想をタタキ台として先の[情報化専門委員会]に提出し、電子化図書館として備えるべきトータルシステムの観点から企画・設計への専門的検討をお願いしたいと思っています。また当面は、適性規模とインテリジェント機能を備えた分館をプロトタイプとして、情報工学部キャンパスをベースにシステム開発と運用を行い、そこで確立した電子化システムと運用のノウハウを、いずれ増改築が予定されている工学部図書館に導入すると言った整備計画を考えています。

本学附属図書館の電子化構想を具体化するに当たっては、これから様々な難しい問題が予想されます。先ず第一に、附属図書館には独自で電子化システムの企画や設計が出来る情報専門の担当事務職員が配置されていないということです。これは他の部局においても同様な状況であろうかと思えます。従って、電子化構想立案の段階において、情報科学センターや情報化専門委員会の専門的立場からの指導が是非とも必要となります。先だって、情報科学センター長(柏木教授)と情報化専門委員会委員長(竹内教授)に附属図書館からのこの様なお願いをしました所、真剣に対応いただくとのことで大変有り難く思っております。一方、電子化システムの構築に当たっては、各種情報機器やその標準的運用システムの導入はメーカーに発注するとしても、各システムの有機的運用システムは本学の環境に合ったものとして独自に開発しなければなりません。その際、限られた要員で多くの業務に充っているおられる情報科学センターにシステム開発を一方向的に委託するのは難しく、例えば情報化専門委員会の中の作業委員会にご支援いただくことになろうかと思えます。ただし作業委員会としても、すべての開発業務に携われる専門家を抱えているわけではなく、教務システムの電算化に観られるように、一教官の献身的努力とサービスによってシステム構築がなされている現状です。せめてその功労が、学術的業績として学内外で評価される様な何らかの対応を図れないものかと痛感しています。その他に、電子化のための当初設備予算を如何に確保し、急速に発展していくであろうネットワーク技術に適応した電子化システムの更新とその管理・運用体制をどのように確立するかと言った問題もあります。当該部局としましては、電子図書館の実現を本学の緊急且つ主要なプロジェクトとして位置づけ、積極的に情報化推進を図るべく本学関係当局に要求すると共に、現図書館職務体制の改組・改革や職員の情報処理教育に向けて目下鋭意努力している所でございます。

この度情報科学センター広報の巻頭言執筆の依頼を受け、この方面の専門性に欠ける私としましては一体どのような内容を書けば良いのか当惑しておりましたが、自由に何を書いても結構ということでしたので、附属図書館の電子化という側面から情報科学センターへの要望を述べさせていただきました。同センターには、マルチメディア導入計画の実現に向けての主導的役割を始めとして、全学からの多様なシステム開発要求への対応が期待されています。最後に、現在情報工学部における[情報化専門委員会]が全学の委員会として機能するような拡張改革を図り、各学科の情報専門教官や学部事務職員の協力の下で、今後とも情報科学センターが本学の情報化推進体制の要として益々発展・寄与されますよう切望して止みません。